

個別共同研究 3 中国・韓国の旧日本租界

東アジアにおける紡績工場

— 鐘紡社宅街を中心に —

富井正憲
TOMII Masanori

はじめに

本研究は1910年代初め（明治末）から1945年（第2次世界大戦終戦）まで中国、朝鮮に進出し、経営された日本の紡績工場の社宅地を対象として、都市の空間形成の一端を解明することを目的としている。

上海、青島、ソウル、光州、平壤に建設された東アジアの鐘淵紡績工場社宅街を対象に取り上げ、当初の図面、現存及び現況図、新旧の地図、絵葉書、古写真、航空写真、衛星写真、関係者への聞き取り調査等の非文字資料を用いながら、それぞれの工場における全体計画、福利厚生施設、社宅についての調査分析を行い、当時の租界及び植民地の中における工場地域で働いた人々の生活空間がいかなるものであったのか、中国租界と朝鮮植民地と日本国内の間では施設環境に如何なる相違があったのか、また企業家はどのようなユートピアを描いていたのか、そしてそれらの住宅地は現在どのようになっているのか等についての居住環境を明らかにし、租界及び植民地という場における人間活動の一端を報告したい。

鐘淵紡績の中国・朝鮮への進出

1921年より1930年まで社長を務めた鐘紡の経営者武藤山治（1867～1934）は米国より帰国した翌年の1894年に鐘紡に入社し、同じく米国帰りの建築家平野勇造と組んで、家族主義の理念のもとに労使一体型の福利厚生施設を充実させた兵庫工場を1896年に完成し、操業を開始した⁽¹⁾。またその後を継いで1930年から1944年まで社長をつとめた津田信吾も武藤の博愛主義を引き継ぎ、合わせて中国においては「利益3分法」を唱え、利益を国と現地人と企業がそれぞれ3分の1ずつ分けあう方針とした。

こうした鐘紡の経営者による労働者の帰属意識を育て、労使一体感を以って企業発展を成し遂げようとする「家族的温情主義」の思想が、1925年の五・三〇運動に際してのストライキの被害が在華坊のなかで最も少なかった原因を生んだ。これについては芦沢知絵の詳細な論考がある⁽²⁾。

鐘紡が大陸に進出したのは1911年に絹糸紡績株式会社を合併して、その傘下にあった蘇州江沿いの上海製造絹糸株式会社絹糸工場（後の公大第三廠）を継承したときに第一歩を踏み出した。本格的な進出は1914年の第1次世界大戦勃発の青島陥落後である。1920年に上海市郊外平涼路の黄浦江に

近接する9万9千余坪の土地を確保し、1922年に公大紗廠工場の操業を開始した。上海では続いて1925年に揚樹浦路黄浦江沿岸に位置する英人経営の老公茂紡廠を買収して「公大第二廠」を操業する。その後は1939年に、先の公大第三廠から独立して「公大第四廠」ができる。現在は第一、第二工場は操業を停止したまま第三、第四工場は廃止されて、その跡地に高層住宅が建つ。

青島においても上海に1年遅れながらも1921年に市郊外工場地帯の滄口地域に25万坪の工場用地を確保し、1923年より操業を開始した。1937年の日中戦争時に工場内建物の多数が破壊焼失したが、1939年によく再開した。青島工場は当初社名を鐘淵紗廠と呼んだが、途中で「公大第五廠」と改称した。終戦の1945年には「中国紡織建設公司青島第六廠」の新工場名に変更され、現在まで操業を続けている。

北の天津においては進出がかなり遅れた。1936年に中国人経営の「天津祐元紡織公司」と河北地域の「天津華新紡織公司」の二つの既存工場を買収し、それぞれ「公大第六廠」「公大第七廠」として同時期に操業を開始した。現在は第六工場は全て取り壊され、ウォーターフロントの複合文化施設建設がスタートした。また河北の第七工場は紡績機械の修理を中心に現在も操業を続けている。

1920年代以降に鐘紡は上海、青島、天津に、次々と大紡績工場を建設して、その従業員数はほぼ1万人に達した。鐘淵紡績の在華事業所である上海製造絹糸株式会社は1942年に社名を変更して「鐘ヶ淵公大実業株式会社」となる。

以上、上海に第一、第二、第三、第四工場、青島に第五工場、天津に第六、第七工場の合計七つの工場を所有していたが、新規に土地を確保して工場を建設したのは上海の第一工場と、青島の第五工場の二つのみであり、他の五工場は既存工場を買収して進出した。

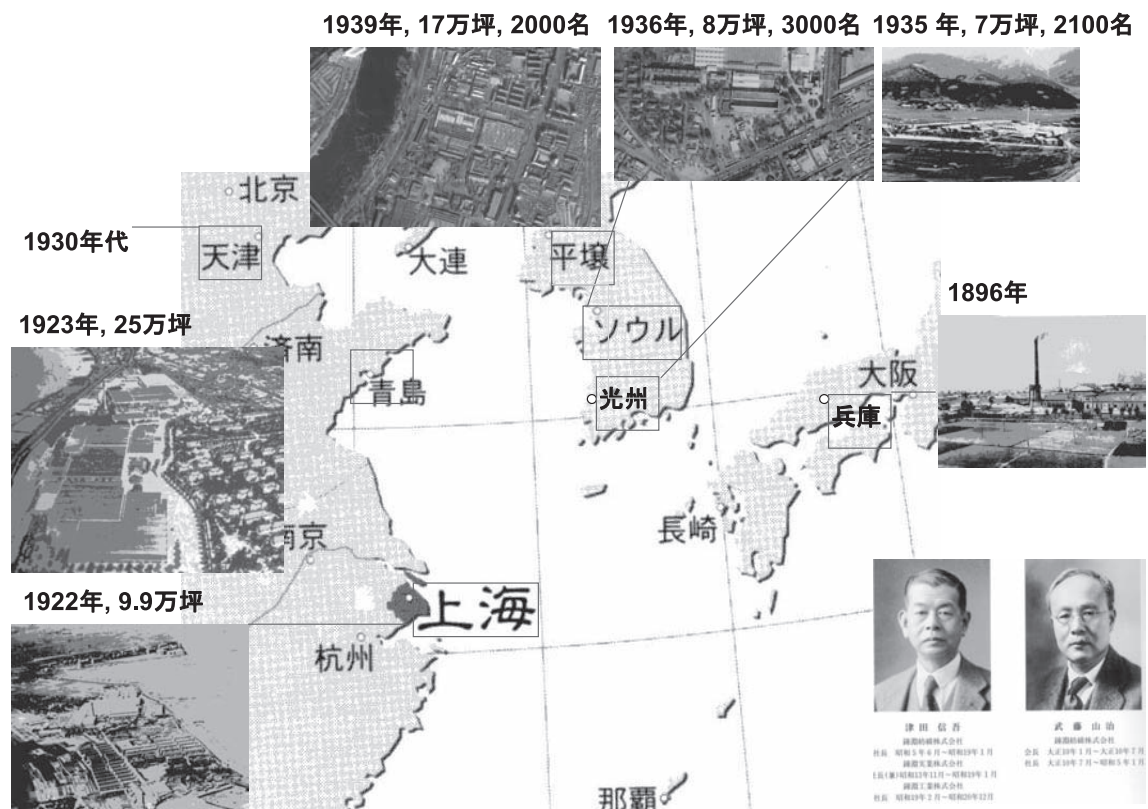


図1 鐘淵紡績の中国・朝鮮への進出

朝鮮においての鐘紡の進出は1931年の満州事変を契機とした半島への産業の誘致が開始された後である。当時の宇垣総督の求めに応じ、津田信吾社長は朝鮮にわたり、宇垣総督の政策に全面的に協力する約束をし、その上朝鮮総督府に勤務していた宇垣の片腕であった片岡勉を朝鮮出張所長として招聘した。1935年光州に約7万坪の敷地に工員約2100名の全南工場を、続いて1936年京城（現ソウル）に8万坪の敷地に工員約3000名の永登浦工場を、また1939年には総督府の強い意向に応じて平壤船橋里にも約17万坪敷地に第1期事業として工員約2000名の人絹工場を建設操業した。

以上の鐘淵紡績の中国・朝鮮への進出をまとめたのが図1である。

中国租界の工場村

鐘紡が中国旧租界に新規に計画建設した上海公大第一廠と青島公大第五廠の二つを取り上げ、その全体計画、福利厚生施設、社宅、現況状況について考察する。

◇上海公大第一廠：公大紗廠工場（のちの公大第一廠）は、上海市郊外平涼路の黄浦江に近接する9万9千余坪の土地を確保し、1922年に操業が開始された。建設時の図面類は入手されていないが、当時の航空写真に現在の衛星写真、さらに現況建物配置図をベースに現地調査を行った。敷地は租界の最東端、運河に近接した郊外地に位置する。敷地内の北約半分の地域には工場が位置する。現在閉鎖中の工場のなかには事務所棟、単身者用の合宿所二棟が現存する。敷地の中央部分はその写真を見ると緑で覆われていたが、現在東側には六、七階建ての中層集合住宅が七棟新しく建ち、西側は個人綿会社の空き地になっている。敷地の南半分には旧社宅が多数残っている。南東区域には外庭付きの戸建てや長屋式の旧日本人社員用住宅が一八棟現存する。煉瓦造二階建てで、外観はバルコニーやテラスを持つコロニアルスタイルが多い。中央を南北に走る幅員のある道路をはさんで南西区域には二階建て煉瓦造の中国人工員用広東式里弄住宅が一四棟二列が並び、計二八棟現存する。住戸密度は高い。

更に南下端の地域は戦前の写真では建物はなく樹木が多かったが、現在は東側は三階から六階の低中層と一七階の高層集合住宅が新しく建っている。また南西角には建て直した小学校が位置する。

1945年12月の接收委員会による報告書⁽³⁾によれば、福利厚生施設の建物は以下のとおり判明する。医院本館（二層一部地下・煉瓦造瓦葺き、269.7坪）、中国人食堂事務所（平屋・水泥鋼骨、178.3坪）、茶館（二層一部地下・中国式煉瓦造・黒瓦葺き、269.7坪）、茶室（平屋・日本式平屋木造鉛葺き、26.3坪）、日本人浴室一棟（平屋・煉瓦造赤瓦葺き、49.2坪）、劳工浴室一棟（二層・煉瓦造瓦葺き、62.0坪）、公大小学校一棟（二層・煉瓦造瓦葺き、242.6坪）、幼稚園（平屋・日本式平屋木造鉛葺き、22.4坪）、住宅前小商店一棟（三層、290.0坪）、新特甲住宅一棟（二層・日式煉瓦造、28.6坪）、旧特甲住宅三棟（二層・日式煉瓦造、91.3坪）、旧甲住宅一棟（二層・日式煉瓦造、一、二階別世帯、330.7坪）、新甲住宅一棟（二層・一、二階別世帯、70.8坪）、乙住宅三棟（二層・煉瓦造赤瓦葺き、1351.8坪）、丙住宅三棟（二層・煉瓦造赤瓦葺き、965.7坪）、共同式住宅二棟（二層・煉瓦造赤瓦葺き、434.1坪）、華人住宅（四）棟（二層・中国式煉瓦造瓦葺き、3438.2坪）、共同式宿舍一棟（二層・中国式煉瓦造瓦葺き、1012.2坪）、女子工房一棟（三層・住営式煉瓦造、649.2坪）

この他の貴重な資料としては第一公大工場を紹介した戦前の POST CARD ⁽⁴⁾がある。このなかから社宅と厚生施設に関係するカードを取り上げると、網球場、中国人工房、工房、医院、花園、花園内稲荷神社、遊園地、中国人食堂、小学校及び補習学校、倶楽部其日園、花園内其日亭及水池、中国人住宅内景、中国人礼拝堂がある。先の建物リストのほかに新たに稲荷神社、補習学校、中国人礼拝堂があったこと、建物以外にも外部に網球場、花園、水池が用意されていたことが認められる。

1926年の井村薫雄の著書によれば「公大第一工場には、中国人従業員のための社宅、医療衛生、教育、娯楽、廟などの諸設備が設けられていた。そして同工場従業員は門外に一步もいずることなく、悉く工場内にて所要を満たすことができた」と記述されている。また1929年に中国紡績を視察した A. PEARSE も公大工場は「職工に文化的施設を施すに成功した、即ち該工場は支那人村を建設し、これに病院、浴場、倶楽部、売店、学校、庭園、運動場、食堂の諸施設を有して居り、要するに日本にある福利施設を其の儘支那に移したるものである」と報告をしている。支那人村とまではいえないが、時代を考えるとこの二つの報告からも鐘紡の厚生施設の充実ぶりには目を見張らされる。

以上の上海公大第一廠工場村社宅群の図面と写真をまとめたのが図2である。配置図と写真の内、左が中国人社宅、右が日本人社宅である。



図2 上海公大第一廠工場村社宅群

◇青島公大第五廠：青島第五廠は滄口大馬路と膠州湾に挟まれた市郊外工場地帯に位置する。25万坪の広大な工場用地を確保し、1923年より操業を開始した。1940年作成の貴重な全体配置図がある。敷地は広く、25万坪である。膠済線に沿った東側に工場、中央に日本人社宅、中央道路をはさんで西側に中国人社宅、南に南山公園、更にその公園南に中国人用の南山社宅が配置されている。表門は大馬路の北西端に位置する。更に詳細な建物配置図から各福利施設をここに挙げれば、先ず日本

人社宅地域には遊園地、遊園地の一部に神社と境内、貯水池、テニスコート、倶楽部、茶室、浴場、売店、理髪所、図書館、売店がある。次に中国人社宅には専用の茶館、浴場、厠があり、その他に工場と社宅の間に病院、病棟舎、宿舍、食堂、合宿所、女子合宿所、温室が位置する。また隣接する塀の外には広い公園と球場がある。

1925年に勃発した五・三〇事件の後には、被害の少なかった鐘紡の工場村がおおいに推奨された。以後のストライキ防止策として、「工場におけるダン壁門戸等出来るだけ其防備を堅固にするは勿論自家職員の合宿所或は住宅等に於ても可成集合主義を執り他会社職員又は無頼のとの混入雑居を避けしむるの策を執る可し」という方針が日本領事館から在華紡に通達されるほどであった。⁽⁶⁾

日本人社宅は規模別にA型からD型までの四タイプが用意され、その数は56棟219戸である。住戸は戸建と長屋式の二階建てから構成され、外観はテラスやバルコニーのあるコロニアルスタイル、内部は畳の和風スタイルである。

また中国人社宅は上海の広東式里弄住宅ではなく、めずらしい分棟平屋型が88棟732戸計画されている。近くにも南山中国人社宅14棟があるが、住戸数は不明である。

判明した日本式と中国式の社宅を合わせただけでも、その総数は158棟951戸にのぼり、大きな集団住宅地である。現在も全体の7割程度が現存し、中国の住人は諸施設を継承しながら一団地の生活をしている。

創業時の工場は1937年に多くが破壊焼失し、現存建物は1939年に再建された施設である。佐藤武雄によれば建て直された日本人社宅はそれ以前に比べかなり日本的な様式になっているとの記録が

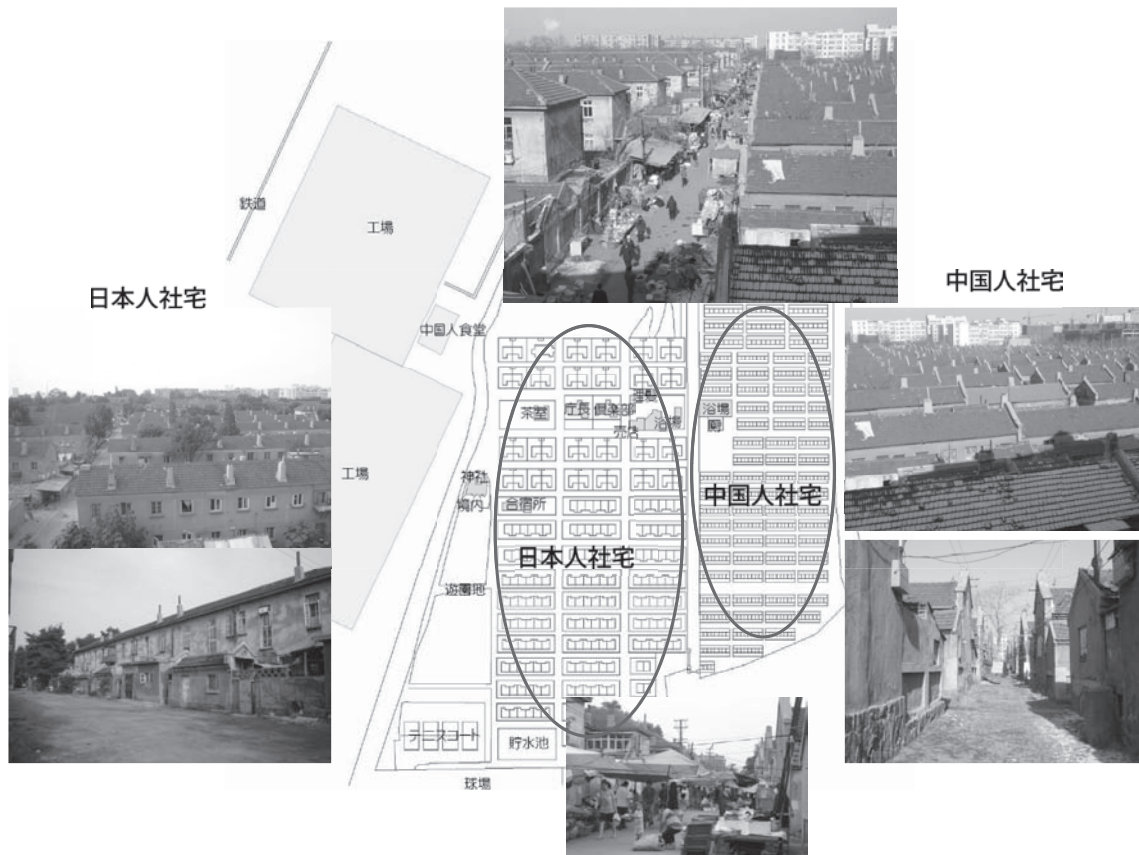


図3 青島公大第五廠工場村社宅群

(7)
残る。

以上の青島公大第五廠工場村社宅群の図面と写真をまとめたのが図3である。配置図と写真の内、左が日本人社宅、右が中国人社宅である。

朝鮮植民地の工場村

中国旧租界の工場村に続き、その約10年から15年後に朝鮮植民地に建設された光州全南工場、京城永東浦工場、平壤船橋里工場の3つの鐘紡工場を竣工順に取り上げ、その全体計画、福利厚生施設、社宅、現況状況について検証する。

◇光州全南工場：全南工場は1935年光州市林洞の約7万坪の敷地に工員約2100名の規模で操業を開始した。現在建設時の図面は無いが、当時の鳥瞰写真と今の衛星写真から全体の概略が把握できる。敷地は菱形をなし、中央に工場、その東側に大規模な社宅群、また南側にも工場との間に空き地をはさんで小規模の社宅群がある。東南に位置する正門は現在と変わらない。本部事務所もそのまま存続している。また敷地の北西外部には工場設立時に市民のために寄付した運動場・娯楽施設のための広い敷地が位置する。

全南工場は朝鮮戦争時に工場施設の多くを焼失したが、その後再建された。1961年には工場が2つに分割され現在は従来の全南紡織株式会社と日新紡織株式会社が操業を続けている。

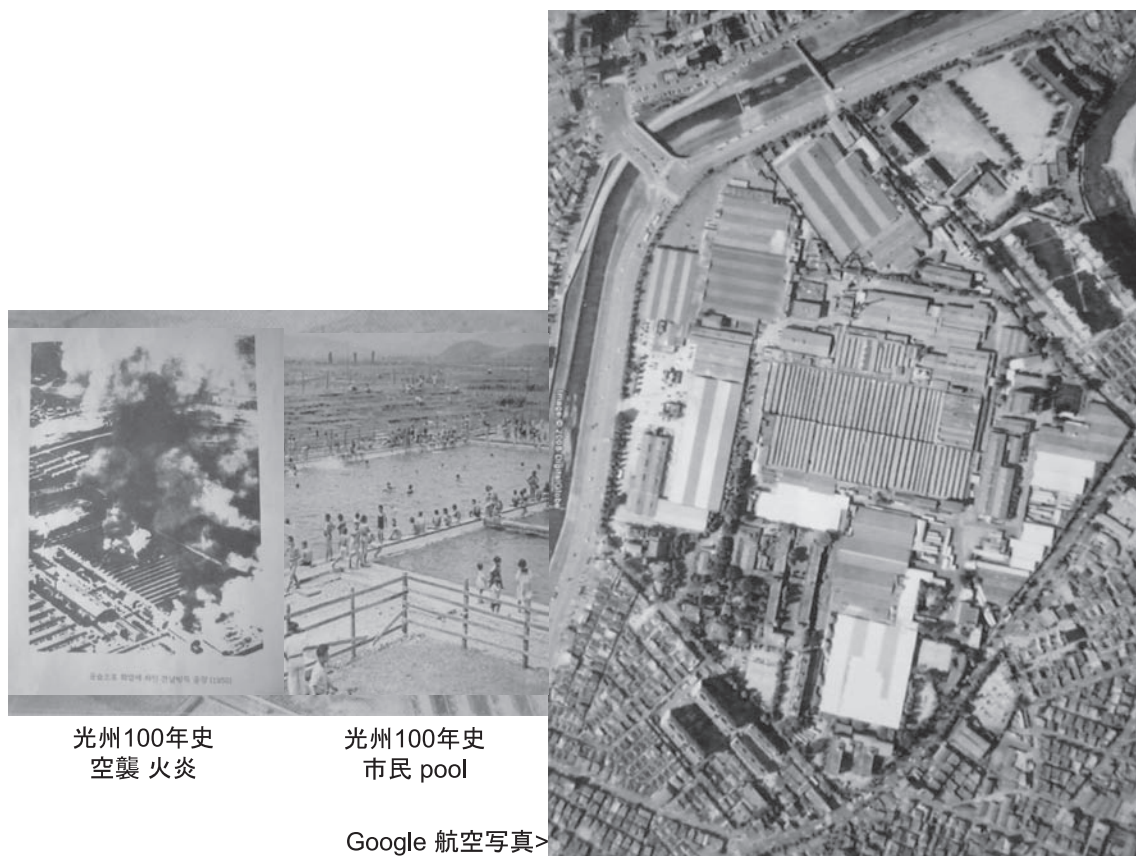


図4 韓国：光州全南工場村

分割した2つの会社の厚生施設の内容を資料からみれば全南紡績株式会社は700名同時収容の食堂(525坪)、病院(155坪、二層建物)、浴場(男・女)、理髪所、売店、娯楽室、運動施設(庭球場、排球場、籠球場、卓球場)、それに社宅施設は1473名収容能力のある三層建物の寄宿舍(1877坪、138室)、男子独身寮一棟(53坪)があげられている。

また日新紡績株式会社には幼稚園一棟(32坪)、公民学校二棟(201坪)、附属病院一箇所(255坪)、職場理髪館一箇所、運動場施設(庭球、籠球、卓球、排球)と寄宿舍五棟(1204坪)、社宅(1443坪、62世帯)が報告されている。このほかには鐘ヶ淵が建設時に市民のために寄付をした広い運動場と水泳場3面の写真が残っている。現存調査によれば、火災から残った工場、事務棟、合宿棟の一部が現存している。また、創業時に位置した同じ場所に幼稚園、医院の新しい建物がみられる。

以上の鐘紡光州全南工場村の現在の航空写真と、戦前の水泳場それに朝鮮戦争時の火災写真をまとめたのが図4である。

◇京城永登浦工場：永登浦工場は京城(現ソウル)南の漢江を渡った郊外地にあり、永登浦地区画整理地区の駅前工場地帯に位置した。敷地は約8万坪あり、工場は1936年11月に竣工し、従業員の数は男子工員270名、女子工員1870名で操業を開始することとした。⁽⁹⁾

1930年代の市街地計画永登浦地区画整理計画図は永登浦地域一帯の街路、街区割、学校用地、公園が記入されている。鐘紡の用地にあてられた場所は最も大きな空地で表現されている。しかもその敷地には鉄道線が引き込まれている。また同時期に描かれた永登浦駅前将来予想の鳥瞰図には鐘紡用地にすでにのこぎり型屋根の工場と事務所建物が描かれている。このように鐘紡の敷地は京城府の地区画整理によってすでに都市環境が整備された敷地が用意され、企業は選択した敷地の中に建物を建設することだけでよかった。しかも隣接する道林町(現文来洞)住宅地には1940年代に入ると設立された朝鮮住宅営団によって労働者のための住宅が国策的に大量供給されたのである。⁽¹⁰⁾ 中国租界とは大きく異なる。

建築雑誌「朝鮮と建築」の1937年の新年号巻頭には完成した鐘ヶ淵紡績株式会社京城工場の事務所全景、同貴賓室、アパート全景、女工寄宿舍の写真が掲載されている。アパートと寄宿舍はともに鉄筋コンクリート3階建てのモダンな外観を持つ。また工場の建設と同時に東洋一を誇る女工寄宿舍が竣工した。その正面の屋根には朝鮮式の楼閣が載っている。これは「津田信吾社長の、働く女工に朝鮮情緒を満喫させようという気持ちの表現であり、永登浦町の新風景の一つ」と期待された。⁽¹¹⁾

雑誌記者が完成なったこの工場を訪ねて「鐘紡京城工場参観記」を発表している。この記事のなかから福利厚生施設や社宅について紹介する。⁽¹²⁾

門を入れて左手に、屋上にシンボライズされた、朝鮮風の展望塔をもった、赤煉瓦三層の建物の、なんとゆう瀟洒な近代的感覚よ。「この建物は?」「寄宿舍です」私は驚いた。こんなスマートな寄宿舍を見たことがない。「工場を見せて頂きに来てて、何だかおかしいんですけど、この寄宿舍から先にお見せ願いませんでしょうか?」「そうですか?」植野氏はひとりごつのようにつぶやいて寄宿舍の玄関の方へ歩かれた。

寄宿舍は三階二棟三千坪、その廊下の長さことよである。この中に約二千五百名の『乙女』が起

居している。室内は朝鮮風で蒸気温突、その他洗面所・浴室・教室・広間・読書室・ミシン室・割烹室・売店・洗濯場等々、それに屋上は体操場になっていて、『紡ぐ彼女達』は吹流れる清新的な空気と、慈雨のように注ぐ陽光との中にその体位を護る。彼女達は昼夜二交替、半数は昼間黒カーテンを下して深い眠りをとる。そうしてこの寄宿舎は故郷の服をまとめてよいという伸伸びい『乙女の園』である。～省略～それから三千人の食堂に入る。『乙女』達の胃袋の偉大さを具象する御鉢にぶっつかって肝を潰し、一日六合に驚きとその幸福とを思った。運動場・男子独身アパート・住宅・病院・倶楽部・武徳殿等々々の近代的明朗な施設経営にも、限りなき喝采を送った。

ここに紹介された記事から、設備の整った宿舎と共有スペース、それに充実した福利厚生施設が現在の企業社宅でも及ばない充実した共同生活の内容を持っていたことが理解できる。この参観記には併せて、津田好みの朝鮮風塔屋を屋上にのせた緩い曲面を持つ近代的なデザインの3階建て「女子寄宿舎」を背景に多数のチマチョゴリの女子工員が歩く写真が掲載されている。この写真は特派記者の撮ったものであろうか、まるで女子大学の寄宿舎と錯覚するようなモダンな印象を持つ。また同じく、掲載されている「男子独身アパート」も階段室の垂直性と大きな開口面を持つ水平性を強調したデザインである。

その他に、父親が鐘紡に勤めていて1941年に永登浦国民学校に入学し、幼少年期を永登浦の社員アパートで過ごした経験を持つ人の証言によれば、⁽¹³⁾「この社員アパートは煉瓦造り三階建ての堂々たる建物であった。それが工場敷地内に何棟もあり、また似たような作りの工員アパートも棟を連ねていた。～このアパートはなかなかモダンな造りであった。水洗便所に加えて台所にはダスト・シュートがあり、暖房はスチーマー（と家ではカタカナ名で呼んでいた）であった。建物の地階は通路になっていて外気に曝されることなく、浴場に歩いて行けた。売店もあったように思う。」と報告され、他に敷地のはずれには広い畑があってそこでとれたトマトを食べたという記載や本人が子供の時撮った屋上写真と通った木造平屋建ての幼稚園の写真がある。

以上みてきたように、女子工員寄宿舎、男子独身者アパート、社員アパートそれぞれが最新設備を備えた耐火式の共同住宅と、入居者が共に利用できるさまざまな施設を積極的に導入していたことが認められる。配置図は不明であるが、1980年代の航空写真からその概略は確認できる。

戦後、工場は京城紡織株式会社に引き継がれた。そして1970年に社名変更して京紡となり現在まで来ている。

永登浦工場は1990年代に再開発が行われ、工場は取り壊されその跡地に大規模な高層団地が誕生し、現在に至っている。

以上の京城永登浦工場村の図面と写真をまとめたのが図5ノ1と図5ノ2である。図5ノ1は1936年作成の永登浦一帯の土地区画整理計画平面図と未来の鳥瞰図、それに現在の航空写真である。図5ノ2は1980年代の航空写真、それにモダンな共同住宅と本部棟の写真である。



図 5-1 韓国：京城永登浦工場村

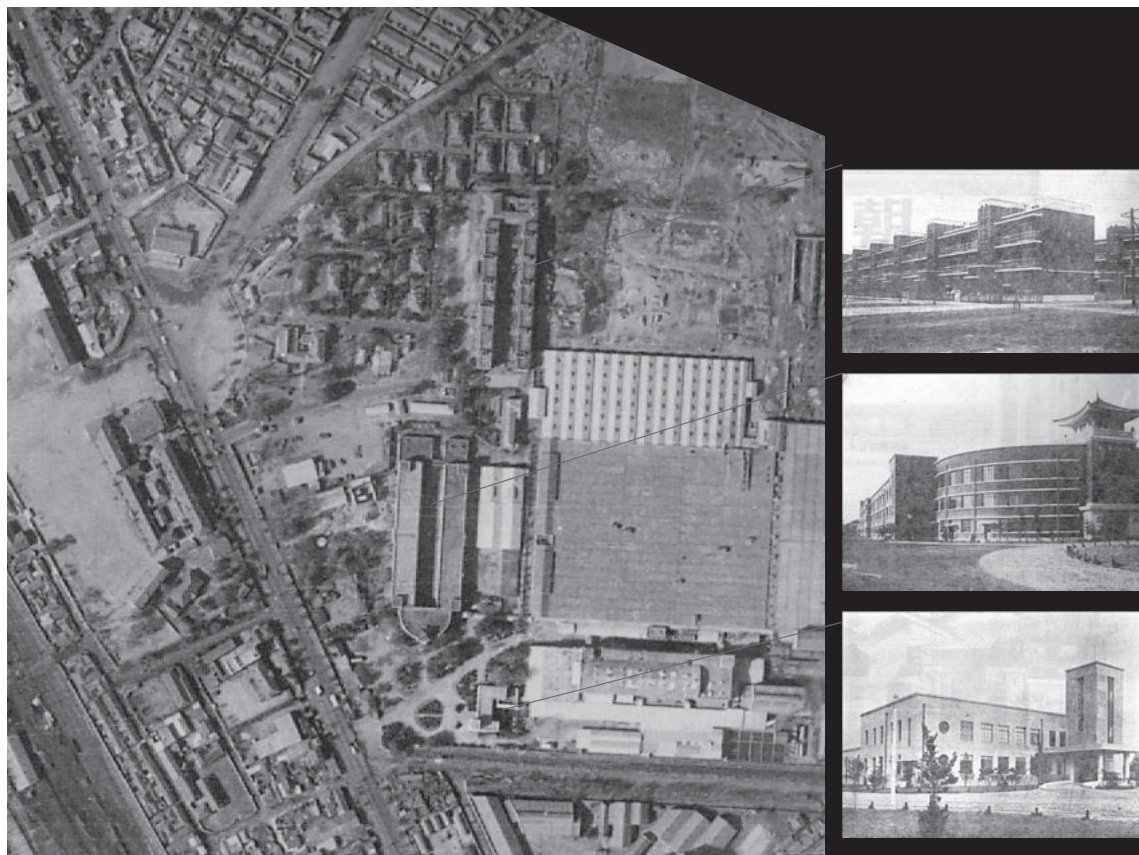


図 5-2 韓国：京城永登浦工場村

◇鐘紡平壤船橋里工場：工場は平壤府船橋里に位置する。この敷地も土地区画整理地区内にある。敷地の広さは約17万坪、第一期事業は1939年1月に竣工した。従業員の数は男女工合わせて約2000名、第四期計画が完了した場合は実に8000名以上の男女工を使用する予定でスタートした。

他の資料がないため、工事が終盤に近付いた1938年5月の建設現場の訪問記事⁽¹⁴⁾から工場内の概要をみることにしよう。

～その後京城多田工務店の工事請負により工事は目覚ましい進捗振りを見せ周囲一里ある敷地内には続々と筍の如く工場、社宅、合同宿舍のアパート二棟、繊維工場病院、男女工宿舍、合同食堂、化学試験室、薬品再生工場、事務所、神社等が今日では平均7歩通りの仕上がりを見せている。～省略～

バラック事務所の前には6分通り完成竣工近き事務所があり現バラック事務所の位置が正門となり新事務所の横が京城神宮の御分體をまつる鐘紡神社基礎工事が進められ鳥居が既に出来上っている、製糖、日穀間のバス道路に面した方には原料の繊維倉庫が化粧するまでに出来ている、この倉庫に貯蔵する繊維原料は大同江岸に船積にて搬入されたものをエレベーター式のものにて釣あげ空中より倉庫内に入荷することになっている。倉庫より南へ約二、三町隔りたる場所には朝鮮第一の大井戸深さ十三米が鑿掘されこの井戸は大同江の水を引あげ貯水して工場内に使用すべく鑿掘した～この大井戸より東南に連なる工場の内部をみるにその規模の広大なることに驚かざるを得なかった、その周囲の構造は外部は全部煉瓦造りであるが厚きキルク板を内面に張り詰めその内面には筒製の煉瓦を張り塗装一定の保温を保つこととしているが、～同工場内部を通して接続せる食堂を見る。三千人の職工が一時に食事が出来得ることいわゆる大食堂はさすが紡績王国の鐘紡であることが認識させられこれに詰めれば五千人は優にはいれることになっている。この食堂の南端に舞台の設備があつて慰安会等の場合には一堂に集めて会場にするのである。食堂の南方に男女工の宿舍が東西に別れて二棟建てられているその近くには病院の大棟がある。男女工の宿舍は誰が見てもまづホテル式と評すであらふ程にその構造は各宿舍の床下にスチームが張り詰められスチームにより冬期の温突が構成されるのである、宿舍の二階は男女工達のために教養室三階は講堂となっている。

その東南には鐘紡が全鮮に誇る三階建の鐘紡アパートが東西に第一、第二と二棟あり通風採光共に申分なくその二棟の部屋数は八十四ヶ世帯各部屋は八畳六畳三畳廊下押入炊事場がある。屋上は全部ベランダで物干をなす様に造られている、この棟の中間が浴場となっている。第一のアパートの内には娯楽場（撞球場碁将棋の出来る日本間、図書室映写場）や売店食堂がある雨天、冬季には地下道を通して浴場や、娯楽室、売店、食堂へ自由に行くことの出来る誠に便利な仕組みとされているが、この外旅館同様の客室が特設され知友の宿泊に使用が出来得ることになっている。

この記事の他に「一日二十萬石湧出をみた作業中の大井戸」と「モダン鐘紡アパート」の写真が掲載されている。

設計者は不明であるが、建設会社は京城の多田工務店である。敷地の大きさ、道路や川との関係、

敷地内の建物としては工場、倉庫、社宅、合同宿舍のアパート二棟、繊維工場病院、男女工宿舍、合同食堂、化学試験室、薬品再生工場、事務所、神社があり、その配置まで凡そ理解できる。

福利厚生施設として病院、舞台付きの大食堂、宿舍の中にある教養室、講堂、娯楽場（撞球場将棋の出来る日本間）、図書室映写場、売店、浴場、客用宿泊施設まで準備されている。

社宅はモダン鐘紡アパートと称される三階建ての家族用共同住宅二棟、同じく三階建ての男女工のためのホテルのような設備を備えた宿舍二棟、それに社員社宅である。アパートの共同使用施設の種類と内容は豊富である。アパートの間取り、ゲストハウスの設置、床暖房の存在、屋上使用、雨の日の動線等当時の最先端の機能と設備を備えた質の高い設計である。

残念ながら現在の状況は確認できていない。

以上の平壤工場の現在の衛星写真と1920年代の船橋里地図、それに1938年の新聞記事をまとめたのが図6である。

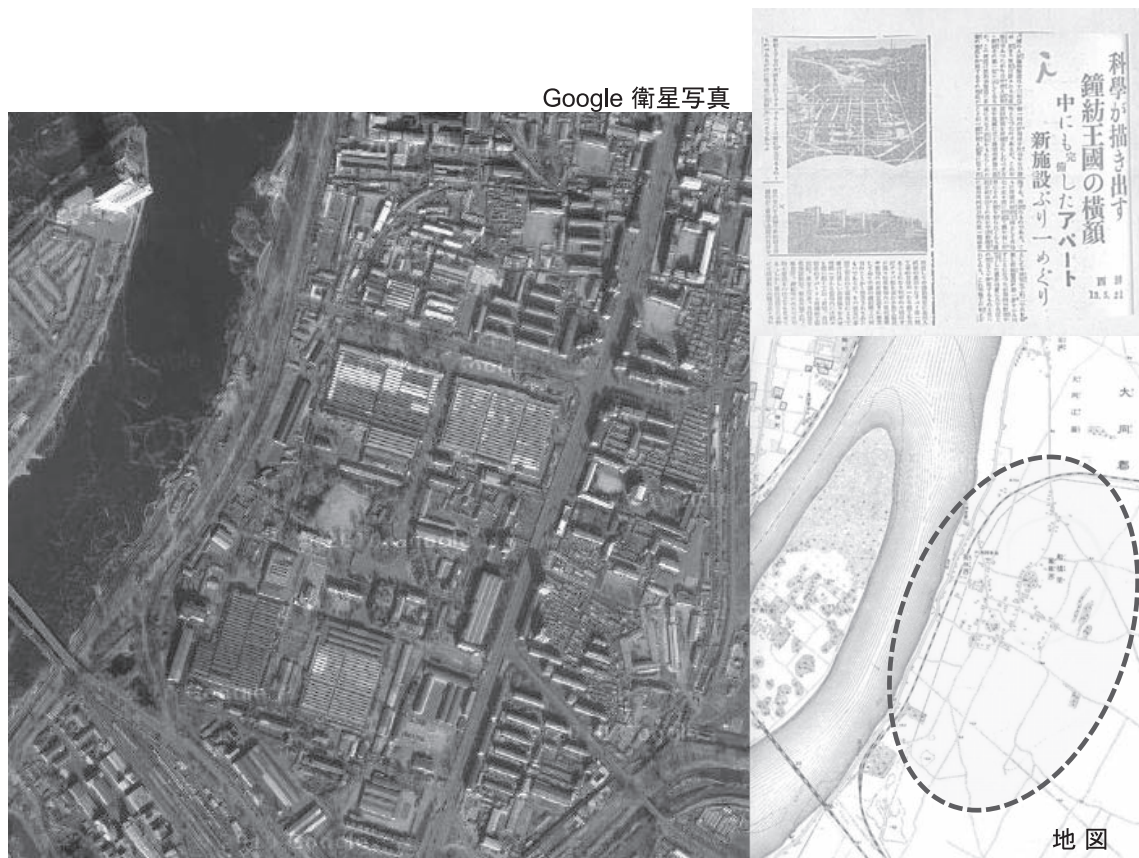


図6 平壤船橋里工場村

おわりに

鐘淵紡績は戦前から国の内外において家族主義による企業共同体の構築を目指した。農村の古い共同体から企業の新しい共同体への移行である。その具現化が鐘紡の工場村であり、シンボルとなった中心の建物が鐘紡アパートである。

1920年代前半に中国租界に進出し、続いて1930年代半ばに朝鮮植民地に進出した鐘淵紡績は武藤山路とそれを引き継いだ津田信吾の2人によって、家族主義の経営理念に基づく独特の工場村が計画

建設された。「図7 租界と植民地の鐘紡社宅」を参照してほしい。

鐘紡の工場村とは一つ塀の中に工場と社宅，社員と労働者，日本人と中国人，日本人と朝鮮人が多数一同に集まって，共に働き，共に生活する新しいタイプの共同体である。図7の租界と植民地の鐘紡社宅は上が朝鮮のモダンな共同住宅の写真であり，下半分が中国における日本人社員と中国人労働者の社宅写真である。

家族主義を実践し，企業共同体を教化していく上では塀に囲まれた一つの村とそのなかの社宅と厚生施設が重要な役割を果たした。特にアパートという共同住宅は鐘紡にとっては最適な住居形式であった。たくさんの人間が集まって共通の場で食事をし，入浴をし，睡眠をし，娯楽をする。住人はその共同の施設の中で集合生活を体験することによって共同体意識を育て，企業家族の一員としての自覚をもつようになる。

戦後日本社会の中心となる企業共同体の確立と実践は戦前の鐘紡の工場村によってスタートし，育てられていった面がつよい。そうした意味から云えば鐘紡の工場村は今日の企業が今後の文化を作っていく可能性を示したよい事例といえよう。

朝鮮半島に建設された最新式の鐘紡アパートは日本において最も早い時期のアパートである東京市営住宅事業の古石場市営住宅（1926年竣工）や真砂町の独身者共同住宅（1930年竣工）と共通する部分が多いことをここで指摘しておきたい。勿論上海の情報もよく知ってはいたであろうが，1925年様式とも称されるアール・デコの的な外観デザインや，浴室や食堂といった共同施設の構成や配置の扱いは極めて類似している。

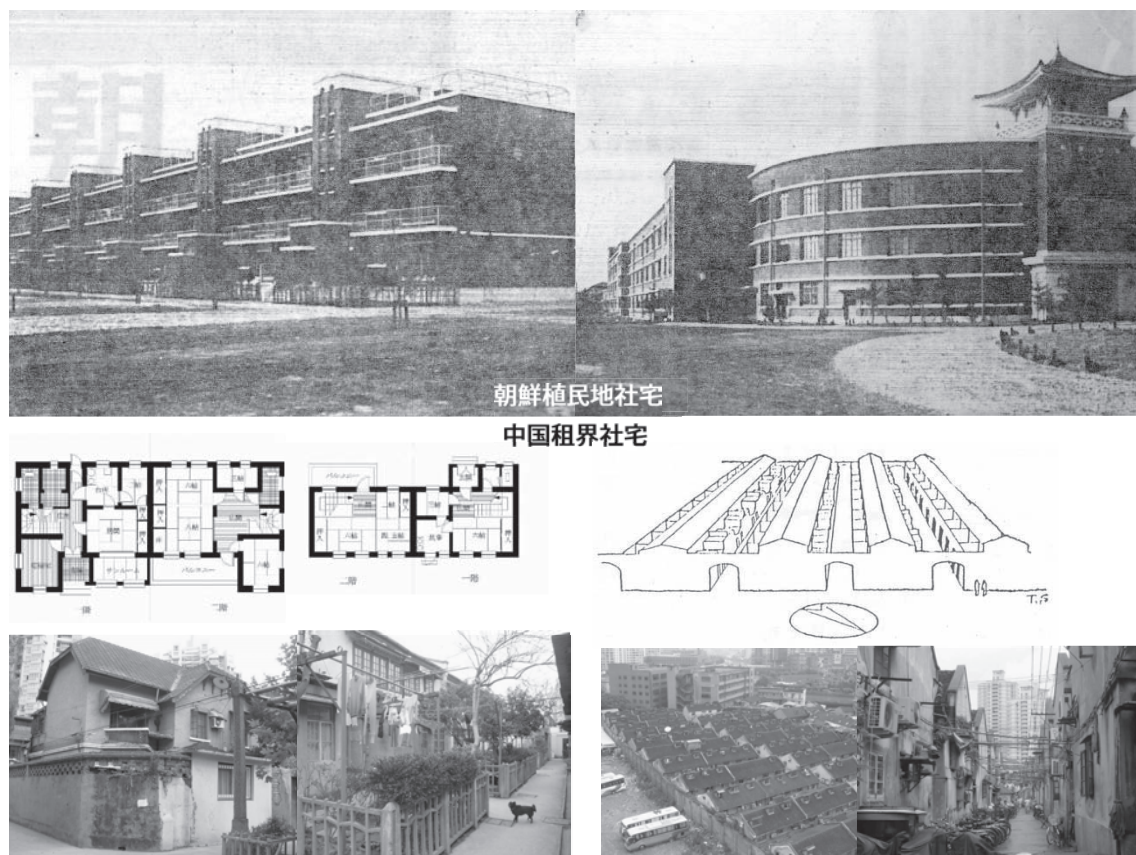


図7 租界と植民地の鐘紡社宅

鐘紡工場村の計画建設には近代の代表的な計画手法である「一団の集団住宅地計画」と「型計画」の2つがかなり早い時期に取り入れられている。更に充実した福利厚生施設と、民族性と地域性にまで配慮した文化的な設計は新鮮であり、かつ独創的である。

租界と植民地では敷地の取得と建設について格段の差がみられる。中国租界では一民間企業として進出して自前で土地を求め、孤軍奮闘しながら環境整備をして工場を建設しなければならなかった。それに比べると、朝鮮植民地では国策企業のように招かれて予め計画された土地区画整理予定地区のなかに工場を建設すればよく、すでに周囲の環境も整備され、治安も維持されていた。

報告した地域や住宅は紡績工場の地方移転に伴い、工場跡地は大規模な開発がおこなわれ、現代的な高層団地や文化施設がウォーターフロント・プロジェクトとして続々誕生し、その痕跡はすっかり消滅しつつある。残された旧社宅住宅地も開発の岐路に立たされている。願わくばこれらの住宅地がうまく保存再生されながら歴史の記憶として未来の都市に継承してってもらいたいものである。

本稿は2010年11月に神奈川大学非文字資料研究センター主催の第2回公開研究会「中国・朝鮮における租界研究のいま」で発表した原稿を加筆訂正したものである。

本稿をまとめるにあたって大里秋浩神奈川大学中国語学科教授、孫安石神奈川大学中国語学科教授、中国の陳祖恩前東華大学人文学院教授、張尚武同済大学建築与城市规划学院教授、李百浩武漢理工大学建築学科教授に現地でも多大な調査協力をいただいた。ここに記して、深甚の謝意を表する次第である。

最後に、文章中、当時の呼称をそのまま用いた箇所があることをおことわりしておきたい。

注

- (1) 「鐘ヶ淵紡績・兵庫工場の福利厚生に関する一考察」藤谷陽悦他、建築学会 学術講演梗概集 2000年.
- (2) 在華紡の福利施設～内外綿上海工場の事例を手がかりとして～芦沢知絵 中国研究論叢第7号 (2007.8) PP 23～40.
- (3) 上海市 館所蔵資料 Q 192-16-384 中国紡織建設公司上海第19紡織廠の中の接收委員会による1945年12月の報告書(民国34年12月4日作成)の添付資料「公大一廠内の建物設備明細」(P 75)
- (4) 大阪朝日新聞富士倉庫資料「上海 F 012-18 政治」公大 POST CARD 28枚 COPY 公大紗廠(鐘紡支店)
- (5) 『紡績の経営と製品』井村薫雄, 上海出版協会, PP 347. 1926年.
- (6) 「在支内外人経営工場ニ於ケル労働者待遇関係雑件」(外交史料館史料3. 7. 2. 10) 商第299号「支那ニ於ケル邦人経営ノ同盟罷工ニ関スル件」(1925.8.19付)
- (7) 調査報告「中支に於ける邦人住宅事情」佐藤武夫, 武基雄, 建築学会集論文第30号, 1943年(昭和18年)9月, PP 182～188.
- (8) 光州市史 PP 449～450.
- (9) 『朝鮮と建築』1935年4月号 PP 48.
- (10) 「朝鮮住宅営団の住宅に関する研究(2)」富井正憲他 住宅総合研究財団研究年報No. 16. pp 79～89. 1990.
- (11) 「京城日報」1936年10月30日.
- (12) 『新興産業』1936年 特派記者 粉河寺涼子 韓国国立中央図書館所蔵
- (13) 日々是好日「在朝日本人の回想～鐘紡永登浦工場跡」2005年4月15日.

- (14) 「科学が描き出す鐘紡王国の横顔 中にも完備したアパート 新施設ぶり一めぐり」西鮮日報 1938.5.
21

参考文献

- 『ドキュメント昭和 世界への登場 2 上海共同租界』 角川書店
NHK “ドキュメント昭和” 取材班編 1986年5月5日発行
『鐘紡100年史』 鐘紡株式会社 1988年発行
「戦前における日本紡績企業の海外活動～鐘淵紡績会社の事例を中心として～」 桑原哲也 六甲台論集 第22
巻1号, 1975年4月.
『Offspring of Empire—The Kochang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945.』
Carter J. Eckert, Copyright, 1991 by the U. Washington Press.
『図説・近代日本住宅史』 内田青蔵他, 鹿島出版会, 2001年
『同潤会に学べ・住まいの思想とそのデザイン』 内田青蔵, 王国社, 2004年
『社宅街』 社宅研究会編著, 学芸出版社, 2009年
研究懇談会資料「企業経営都市の盛衰とその空間構成」2010年度日本建築学会大会(北陸)企業経営[若手
奨励]特別研究, 日本建築学会, 2010年